



総代会特別決議



人々の協同と自立による復興と大地再生を誓い、
核と原子力のない安心の社会に向かいます

2011年春、東日本大震災と東電福島第一原子力発電所の事故は、私たちの暮らし・意識・社会を問い直すことを私たちに課しました。

わたしたちの健康は、「いのち育む食」を提供してくれた生産者のおかげです。これまでに感謝し、気持ちの支えも含めて被災と放射能汚染にあった生産者の復興・再生に具体的に協力し、共にこの困難を乗り切っていくことが地域の人たちの自立の連環につながり、格差や差別のない公正な日本社会、世界に連なることを願います。

生命の糧を育む大地と海の放射能汚染の除去・低減・再生を、生産者と共に取り組みます。この相互の努力こそが共に願ってきた「食の安全」への道です。

原子力発電は、生命や自然、食の安全とは共存できないと同時に、私たちの便利なくらしが他の犠牲の上に成り立っていたことをも気付かせました。

放射能汚染は「食の安全」を脅かし、消費者と生産者の信頼の絆さえも破壊して、人々を不安と苦渋に落とし入れました。

「安全神話」を推し進めた国の責任、当事者である電力会社の責任は最後まで問われませんが、原子力発電に正面から向き合ってきた私たちの責任も免れません。私たちは12年前、東海村JCO臨界事故の際「国のエネルギー政策の転換を求める声明」を決議していました。また、組合員からの六ヶ所核燃料再処理施設、上関原発への問題提起があったにもかかわらず、粘り強い運動にしてゆく努力を怠りました。

これ以上、次世代に禍根を残さないために「原子力に頼らない社会」をつくるために組合として、個人として、多くの市民とつながりながらできる行動を提案します。まずは国がすべての原発を廃炉にすること、国・企業が放射性廃棄物処理も含めて責任を持って事故・事後処理、賠償を行うことを求めます。私たちの世代の責任において最後まで見届けなければなりません。

同時に私たちが、資源浪費の大量生産と消費のあり方を変え、何が本当に必要なものかを判断し、具体的な運動・活動をすすめます。原発をなくしても私たちが安心して平和に暮らしてゆけることを証明するために、多くの人々と協力し、暮らし・社会を変えてゆく具体的な行動を起こすことをここに決意します。

この決議を言葉に終わらせることなく、継続して努力することを誓い、全組合員に呼びかけます。

2011年6月11日 常総生活協同組合第38回総代会 参加者一同

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

被災生産者をお迎えし、
共に力をあわせて復興と再生を確かめる

6/11 第38回通常総代会 全議案、可決承認



来賓あいさつに代えて「命の道」を歌ってくれた魚住さん親子



岩手 コタニさんのお話し



石巻 高橋さんと
(交流会にて)



【総代会議決結果】

(日 時) 2011年6月11日 9:30~11:57 (場 所) つくば国際会議場406
(出 席) 有効総代出席数 99名 (本人出席52名 書面出席47名) 総代総数100名
(議 長) 福本愛、島直美、染谷みどり (※議長は採決に加わらず)
(議事録署名人) 飯野就子、茂田初江

- 【第1号議案】2010年度活動・決算報告承認の件 可決承認 (賛成96 反対0)
- 【第2号議案】2011年度活動方針・予算案承認の件 可決承認 (賛成96 反対0)
- 【第3号議案】次期10年~くらしの見直しと協同に向けての件 可決承認 (賛成96 反対0)
- 【第4号議案】役員補充の件 拍手で承認
- 【第5号議案】議案議決効力発生の件 拍手で承認
- 【特別決議】自治・協同による復興・大地再生を誓い核と原子力のない社会に向かう決議

【被災地から組合員へ感謝のことば】

宮城県石巻 高橋徳治商店 高橋英雄社長

「今こうやってここに一緒にいられることの、生かされてきたことの喜びと責任をもってこれから頑張っていきたい」



おはようございます。

宮城県の石巻市から参りました高橋徳治商店高橋英雄です。被災者を代表して御礼申し上げます。

常総生協の組合員の皆さんから義捐金や温かいメッセージも頂きました。職員の皆さん、そして大石副理事長には4月13～21日まで、こ

の人は本当に生協の副理事長かなと思うくらい私と二人でヘドロをさらい、最も臭い部分も出して頂きました。ありがとうございました。

それから、有機農業の生産者魚住さん。息子さんを叱りながら一部隊を率いて頂き、本当に助かりました。鈴木牧場さんを通じて栃木の酪農家小堀さんには重機も紹介頂きました。業者会の皆さんも色々ご支援を頂きありがとうございました。感謝しています。

何から話しているのか分かりません。今日で三ヶ月を迎えます。

自分の家族、当社の従業員は何とか無事でしたが、従業員の中には連れ合いを亡くした方やお子さんを亡くした方がいっぱいいらっしゃいます。亡くなった方、行方不明の方を含めると五千数百名という数ですが、実際は誰さんの関係者とか、隣のおじさんとかお婆さんとかみんな名前があって生活していたのに一瞬で地震と津波で生活を絶たれた、ということです。

たくさんのご支援を頂きました。

当社におきましては、工場のほうにも7メートルの津波が来て、工場の中には溜まったヘドロが40t、捨てた瓦礫が大型ダンプで78台という量になりました。石巻だけで、今回100年分のごみが一気に出ています。520万トンという瓦礫やごみです。それがヘドロ、危険な物質や産業廃棄物と共に海に流れ込んでおります。川の水も、水道が出るようになった地域でも飲んで下痢をされているという方もいます。菌のコントロールもできなくなっているという状況です。それに加えて重金属、PCBの問題も一切解決しておりません。

自分たちはもう復旧に向かいつつあると思っております。

すが、心の痛手はそうではありません。何よりも皆さんのご支援が、継続的なお言葉が私たちを支えてくれます。

私たちは色々なものを頂きました。食べ物のみならず日用品、着るもの、下着の類まで頂きました。でも、避難所で申し上げているのは、「私たちは乞食じゃない。自分たちが頂いたことに対して、今後どういったお返しができるか、皆さんに、どういった復興復活の姿を見せられるかが自分たちの勤めですよ」とお話しをしています。

最後になりますが、今朝の朝日新聞、持ってまいりました。原発事故の推移と数字が載っております。チェルノブイリの何倍か、そんなことはどうでもいいんです。

ただ、大気や特に海に垂れ流された放射性物質は、海に生活をしている人たちにとって、少し上流の水を飲んでいる人にとってこれは取り返しがつかない。後の世代よりもまず、われわれの世代と今育っている少し後の若い世代にとって復興なんていう言葉は、これを前にしたら何も語れない。

皆さんができること、理事長さんがおっしゃいました。私たちができることを今必死になって考えています。

皆さんもできることを一緒に考えていただく、それが何よりのメッセージですし、何よりも笑顔で「あ！どうも！」と色々な生産者さんに声をかけていただくのが私たちにとって何よりもあたたかいメッセージになります。

今こうやってここに一緒にいられることの、生かされてきたことの喜びと大きな責任を持ってこれから頑張っていきたいと思っています。

一緒に何ができるかっていうことを、ここにいる一人ひとりからメッセージ頂きたいくらい今回は未来を考えなきゃならないという原点に立たされました。

私たちは、瓦礫の中から皆さんと立ち上がってまた、頑張っただけでここまで来たよ、皆さんはどうですか、という風に来年、再来年、この場に立てればと思ひながら今日はやってきました。

これまでの応援とエールと、この場に招いていただいた生産者の代表といたしまして挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

【原発被災地、仲間の生協からのメッセージ】

あいコープふくしま 佐藤孝之理事長

「この地に残って暮らすしかないとなったら、この生活環境をどうするか、どうしたら避けられるか、と」

あいコープふくしまの佐藤です。今日は常総生協の総代会に参加させていただき感謝申し上げます。

3月11日の大震災の後、三陸を中心とした大津波に目を奪われました。しかし、同時に原発が水素爆発をして、放射能汚染が広がる中で、だんだん放射能に対する恐怖というのが県民200万人の中に広がりました。大津波や瓦礫は映像で確認できるのですが、放射能は全く目に見えません。体にぶつかっても痛いとも何とも感じないわけです。

私自身もそうですけれども、毎晩0.4ミリシーベルトの部屋の中で寝ています。この2ヶ月間で、福島市・郡山市中心に、3ミリから4ミリの積算の被曝を受けてるわけです。これは子供にとってはどういう数字であるかは皆さん既にご存知であると思います。しかし体は何の変化もないわけです。ないからこそまた不安が増すわけがあります。

そういう中で、どんどん避難が始まっており、我々の生協でも、OCR用紙発行枚数でいいますと、2,400が300減って今2,100ちょっと欠けるくらいです。うちの組合員も小さなお子さんを抱える方中心に300名が県外に避難をしています。まるごと転居という方もいます。

福島県内には、1万5千人の小中学生がいて3万人が避難生活をしています。しかし、事態はちっとも変わっていないわけです。昨日、一昨日もそうですけれども、ストロンチウム89と90が福島市、二本松市でも出ています。有名な飯館村、浪江は当然高いですけども、いわゆる人口密集地でも検出されてるんです。みんなこの不安感の中、どういう風にしているのか、このまま住んでいられるのか、迷いの中で過ごしているんです。

生協としては、この危機にどうしたらいいのか、このままでは生協もなくなっちゃうよ、という話もしながら、やっぱり何故、こういう事故が起きたのか、という学習会を5月にやりました。たくさんの方、地域のみなさんが集まりました。

現地では「福島原発」っていう言い方は嫌いなんです。「東京電力の原発」なんです。福島だけが有名になる必要は全然なくて、東電の問題なんだっていうことをはっきりさせる必要があるって認識しています。

「人災」とかって言われていますけれども、44年間現

地で東電と戦ってきた石丸さんのお話を聞いて、地震とか津波とかの対策を怠ってきたということではなくて、東電がいかに日常的に手抜き保安・保守点検をやって、人間の命・健康よりも利益第一という考え方でずっと運営してきたんです。

現在もその運営は変わっていないですね。250ミリシーベルトの下でも働かせている訳ですね。あれを見れば今度の事故が、働く人なり住民なりの健康なんかいいんだよ、という体質がまざまざとはっきりしていると思うんです。そういう理念とか体質が今回の事故を生んだんだという意味での人災だっという事をはっきりさせることを私たちは学びました。

交流会や学習会に参加した人たちは不安から怒りに変わったって言うんです。いつまでも不安で逃げているふうにもない。借りは返さなくっちゃいけないっていうふうに変ってきました。それから地区委員・理事の人を中心に話し合いをする中で、やっぱりどうしたら避けられるか。本当に避難できるかって言うと、圧倒的な人が避難はできないわけです。家族がいて、職場があって、子供がいて、そこには生活があり、住宅ローンでいっぱいの家が建っているわけです。そこに住んでいるわけです。

そこを離れてどこかにいけるという人は、ごく一部のだけなんです。この地に残って暮らすしかない、という結論を持った人が、現状をどう解決するかということなんです。農家も、我々の生産者もそうです。いろいろ言っちゃってやっぱりこの地で百姓をやるしかない。だったらこの土壌をどうするかっていう問題があるわけです。この地で暮らすしかないとなったらこの生活環境をどうするか。学校のグラウンドの表土を削ろうとか、そういう発想が生まれるわけです。

そういう意味では私たちは学習と話し合いの中でこの地で暮らせる、そして東電を絶対に許さない、という姿勢を広げながら、討論を続けながらこの地で頑張っというこうと考えております。是非、これからも温かいご支

